



義肢裝具士

臼井 二美男

うすい ふみお

東京都荒川区

卷之三

卷之三

白井：両方ですか。夕暮した部分を補って作曲をさせるのが義務だけど、人間は生きて、いる

義肢の役割

度、いろんな人に合う義足が作れると思えるようになつたのは、10年ちょっと経つ頃ですね。今でも1人前になれたなんて思つてないですよ。

— 先日、白井さんの義足を着けたモデルさんが登場するファッションショーを見ました。みんな自信に満ちて、誇らしげでしたね。

白井：ええ。此細かな要素でも、義肢が自分だけのオリジナルなものだと、愛着が湧きますよ

シヨンシヨー「バリコレ」で発表した濃紺の宇宙空間が描かれた義足は、モデル本人がお店で選んで買ってきた布を使用して作りました。ショーンに出演した義足のアーティスト須田まさきさんは、レースが大好きで、レースのドレスを着たときにシルエットが崩れない義足を作つてほしいって、わざわざ大阪から相談に来ました。自分の身体に要望があるのは当たり前ですし、性格や年齢、目指す人生の方

最初のショーやを開催して、写真集が出版されたり、どんどん広がって「バリコレ」のようなショーにも呼ばれるようになりました。

——ショーへの参加を希望する方は多いのでは？

白井：「そんなことはありません。興味はあるけど、自分のコンプレックスをさらけ出す勇気はないかなが出ないんですよ。ウォーキングの練習を重ねて思い切って舞台に上がれば、それが否定する人なんていないってことがわからります。義足を見せるなどをストレスに感じて、このまま自分自身でこなしてあげる

になつたりね。今回のショーや出た6人も、病気やケガなど、さまざま命の問題を孕んで生きていて、1人ひとりがドラマチックなエピソードを持っています。先ほど心の進化の話に繋がりますが、身体的・物理的な進化が内面にも影響を及ぼしています。

二女體正義の如き

——ファッショントリオをするようになったのには、どのようなきっかけがあったのですか？

白井：きっかけは、陸上の選手のむき出しになつた義足が、すごくかっこいいと感じたことでした。それで義足に色を付けたり装飾してみたくなつたんです。着けた子たちも義足がかっこよくなると、今度は外を歩いてみたいっていう気持ちが芽生えました。男の子は短パンで、女の子はミニスカートを履いて街に出で、だんだん人に見せることに自信がついてきたから、ファッショントリオを自主企画したんで

ショリーにチャレンジすることで、マイナスイメージだと思っていた自分の障がいが、チャーミボポイントになっていく瞬間が一人ひとりに訪れます。もちろん時間がかかる人もいますが、みんなに変化の瞬間が訪れるように願いを込めて、僕は義足を作っています。だから、ショリーのときの晴れやかな笑顔を見ると、報われますよね。

モデルを経験した方たちの日常生活は変わっていましたか？

白井：協調性や社会性が育まれるようですね。それまで自分は悲劇の主人公で自分のことしか

人は多いです。そのなかでも障がい者は、たまたま身体が欠損していたり、変形したりする。その動きにくさ、生活のしにくさといふのは、僕は子どもやお年寄りと同じじゃないかと思っています。生きづらさを抱えている人のことを考えられるか。相手の心と身体について想像し、1個人として仲間だと思っているか。障がいを考えるということは、他人のことを思いやれるか、愛せるかっていうことに通じていくと思うんです。

白井・28歳のときを見た、職業訓練校のチラシがきっかけです。僕はそれまで、今でいうフリーーターみたいな感じで、いろんなアルバイトをしながら生活していたんですけど、そのチラシで「義肢」という文字を見たとき、記憶の底に沈んでいた、小学生の頃のことばばつと思い出しました。6年生のとき、憧れ的だった女性の担任の先生が骨肉腫という病気で大脳部から下を切断したんです。その先生が着けていた義足のことをもっと知りたいと思いつき、義肢製作の現場である鉄道弘済会の義思い、義肢製作の現場である鉄道弘済会の義

——どのように義肢装具士としての道を歩まれたのですか？

白井：入社後、義足製作の担当に配属されたんです。3年間は仕上げの工程ばかりで、4年目から下腿義足^{しやぎしゆく}という、膝から下の義足を作らせてもらえるようになりました。5年目からは、技術力に加えて医学的な知識も必要な、大脛義足^{だいちぎしゆく}の製作もできるようになりました。

義足は交通事故だけでなく、病気によつて必要となることもありますからね。その頃、義肢装具士の国家資格を取得しました。ある程

ます。その進化を乗り越えることができる義肢を作らないといけない。朝、装具を着けるときには「またこんなものを着けなきゃいけないのか」って憂鬱になるとよく聞きます。四肢を失うことによって、他人との接触を避けてひきこもりったり、自分自身を抑制してしまう人もいます。義肢は異物ですからね。だから先端技術の素材を使って、身体の一部として機能的であることを目指しています。そのうえで1人ひとりの個性に合わせて、前向きになるデザインや色柄という付加価値を義肢に取り込むことによって、着けることに喜びを

